

ビーチやタッチなど幅広く普及 ラグビーをより身近なスポーツに

静岡県ビーチラグビー協会と静岡県タッチラグビー協会を立ち上げ、会長を兼任する田代剛さん。遠州灘海岸を舞台に毎年開催されている「ビーチラグビー東海大会」の創始者でもある。16年連続開催、参加者累計約3万1500人にもなる東海大会は、まさに田代さんのラグビー愛を物語っている。高校・大学時代にラグビー部に所属し、社会人になってからもプレーヤーとして活躍。ビーチラグビーでは全国大会で優勝経験を持つ。大学時代に名古屋で始めたビーチラグビーを地元浜松に戻ってからもやりたいとチームを結成。ケガが原因でラグビーを辞めてしまった人や、観戦は好きだがプレーは怖いと思われる人も「ビーチラグビーなら」と集まった。楕円球に触れることでラグビーの楽しさを再認識する場とな



浜松でラグビー 普及活動中

ビーチラグビー元日本チャンピオン 田代 剛さん

PROFILE

1971年3月17日生 浜松市出身
株式会社 東海トラベル 代表取締役
静岡県ビーチラグビー協会 会長(日本ビーチラグビー協会理事)
静岡県タッチラグビー協会 会長
静岡県ラグビーフットボール協会理事(浜松ラグビー協会理事)

高校時代、ラグビー青春ドラマ「スクール・ウォーズ」に憧れてラグビーを始め、社会人になってからも活躍。スポーツを入口に着地型観光事業の振興、環境美化に取り組む。浜松市ビーチ・マリンスポーツ推進協議会の構成員でもある。

ビーチラグビー
ビーチラグビーは5人対5人で戦う。一般的なラグビーとは異なり、攻撃時に1回だけボールを前に投げて良い。両手で相手の体を5回タッチすると攻守交代になる。

タッチラグビー
6人対6人で戦う。タックルの代わりに、守備側がボールを持った選手に6回タッチすれば攻守交代になる。

タグラグビー
1チームの人数は4人ないし5人で行う。タックルの代わりに腰に付けたタグをとれば攻守交代になり、身体の接触がないのが特徴。

り、メンバーを集めるのはそれほど難しくはなかったという。そして全国大会の予選に東海大会がなかったため、これも自ら企画。浜松で2日間滞在型の大会を開催すれば地域活性化にも繋がりが、競技人口が減り始めていたラグビーの普及に貢献できると考えたのだ。

「スポーツは年齢・性別・体格など様々な要因で向き不向きがある。接触プレーが得意な人もいれば、タックルが苦手な人もいて、年齢や性別向いている人もいて。年齢や性別問わず楽しめるタグやタッチなども含め、様々な種類のラグビーを実践する「場づくり」はとても大切だ。種類が豊富だと幅が広がり、入りやすくなる。大会などのイベントはとにかく「継続」が命。継続しなければ発展はない。自身の仕事をもちながら、本気でスポーツに打ち込み、運営し続けることは容易で

はないが、それに力を注いでしまっているから」と語る。

浜松で開催される東海大会にはいつも多くの参加チームが集まる。関東と関西の中間という好アクセスも理由の一つだが、それ以上に田代さんをはじめとする関係者が作り上げたコミュニティの力は大きいだろう。アイデアを凝らし、幅広い世代を巻き込み、地域が一体となって実施することで大会のクオリティは驚くほど高まる。それが参加者の満足度やリピーターにつながり大会継続の力となっているのだ。田代さんが築き上げてきたレガシーをこれから先も途絶えることなく次世代へとつなげてほしい。そして浜松のラグビー文化が成長し続けていくことを期待したい。



小笠山総合運動公園 エコバスタジアム戦の 見どころ・楽しみ方は？

やはりアイルランド戦でしょう。日本代表の予選突破の鍵となる大事な試合です。世界ランク3位、優勝候補にチャレンジする日本。胸が高まりますね。しかし「ルールが難しくよくわからない」という声をよく耳にします。ルールはレフリーに任せて、とにかくラグビーの攻防、世界最高峰の迫力を楽しんでください。「ボールを持って走る・パスは前にしてはいけない・パスされたボールは前に落とす」といってはいけない。タックルされたらボールは離さないといけません。これだけ知っていれば十分です。また、大きな体の南アフリカは相手にボールを持たせてタックルするという戦術がありますが、逆に体が大きくない日本はディフェンスで体力を奪われないう、攻撃時はなるべくボールをキープするようにします。このような国ごとの戦い方に注目して見るのも面白いですよ。

ルールはレフリーに任せて 世界最高峰の迫力を楽しんで

ラグビーワールドカップ2019™ アンバサダー

元日本代表 伊藤剛臣 ITO TAKEOMI

ラグビーの未来を担う 次世代へメッセージを

浜松では浜名湖ラグビースクールや学芸中学校などラグビーに打ち込む子どもたちに会いました。アンバサダーとして全国をまわっていますが、これほど歓迎を受けたのは初めてです。大変感動しました。彼らには友達をどんどんスカウトして、ラグビーを楽しもうと仲間をたくさん集めてほしいです。それから「ラグビーを中学生から始めるのは遅い？」とよく質問されますが、遅くありません。僕は高校1年生のときに始めました。小学生の頃は柔道と少年野球、中学ではバスケット部。高校は野球部に入

りましたが、野球の名門で猛者がたくさんいたため諦めました。そこで父親と学校の先生からラグビーを進められ、ラグビーの世界へと入っていくのですが、「国立競技場でプレーしたい。日本代表になりたい。RWCに出たい」と、次から次へと夢やロマンを抱きました。神戸製鋼を40歳で辞めて引退と思っていたのですが、被災した釜石の後輩から「ラグビーで明るいニュースを届けよう！」との誘いで次なる夢ができ、結局46歳までやりました。私の人生はラグビーで輝きました。今の子どもたちも、ぜひラグビーから多くの夢とロマンを得て、未来を輝かせてくれたらうれしいです。

PROFILE 1971年4月11日生 東京都出身

法政二高時代は高校日本代表に。法政大学3年時には大学選手権で25年ぶりの優勝をもたらした。法大卒業後は名門神戸製鋼に入社し、1994年度の全国社会人大会、日本選手権7連覇に貢献した。その後も2度の全国社会人大会、日本選手権優勝を経験。トップリーグ開幕初年度の2003年シーズン優勝に中心選手として貢献した。2012年、神戸製鋼から釜石シーウェイブスに移籍。RWCには2大会出場。現役最年長記録選手として活躍し、2018年1月現役を引退。現在はRWC2019™日本大会アンバサダー、釜石シーウェイブスRFCアンバサダーを兼任し、ラグビーの魅力を発信し続けている。

EPISODE TALK

東日本大震災後、私が所属していた釜石へ一番乗りで復興の応援に来てくれたのは、日本ラグビー協会 清宮克幸副会長が率いていたヤマハ発動機ジュビロさんでした。その後、毎年対戦し、夏合宿など交流を続けています。そして今大会、小笠山総合運動公園エコバスタジアムと釜石鶴住居復興スタジアム(仮称)が、ともにRWCの大会会場となったことにも深い縁を感じます。ぜひ一緒に盛り上げていきましょう。